

横川景三の人と作品

——東山時代漢文学の一断面——

蔭 木 英 雄

横川景三（一四二九～一四九三）は、東山文化の推進者たる足利義

政のよき相談相手であった。例えば、この時代の文化を象徴する東山山荘の造営にあたっては、東求堂の襖の十僧画様を同朋衆の相阿や鹿野助（狩野正信）と評議し（蔭涼軒日録、以下日録と略称、文明十七年十二月十七日の条）持仏堂の命名の諮問に依じて「東求堂」の名を献じ（日録、文明十八年正月十七日の条）「潮音洞」「弄清亭」「漱蘚亭」「掬清」の字を清書したり（長享元年十二月廿六日廿七日の条）するなど、時の蔭涼軒主の亀泉集証が、

（足利義政）

横川和尚事、慈照相公平生御崇敬事也。（延徳二年十一月五日の条）と記すのも当然なほど、義政の文化事業の一翼を担っていたのである。次の文章は、延徳三年正月廿五日、將軍義材が父の足利義視の茶毘の法会の際に、亀泉と交した会話の一部である。

（亀泉）

「今五岳之中、能僧誰也。」愚謹曰、

「五六輩有之、各争機鋒。南禅有蘭坡和尚、相国有月翁和尚、

横川和尚、建仁有三天隱和尚・正宗和尚、東福有了庵和尚、是

也。」

「此内孰出群」愚謹曰、

「横川出群者也。五岳之諸尊宿、陞座拈香、諸御仏事、又者詩文等迄、亦皆得横川潤色、以行之。況於後生之者乎。加之手蹟聲明等亦絶倫也。以故慈照相公御崇敬、無比類。」（傍点筆者）

亀泉は横川と同じく播州の出身で、同郷の誼みからやや誇大して推賞したのかも知れないが、それにしても五山の禅林の中で横川の文筆の才は高く評価せられ、彼は縉紳の漢文学の衰退せる東山時代の日本漢文学を代表する一人物であったのである。

横川景三の経歴については、既に玉村竹二氏の要を得た紹介があるので（五山文学新集 第一卷 解説）本稿では簡単な略年譜を記すにとどめ、彼の詩文について少しく考えてみようと思う。

略年譜（数字は横川の数え年）

永享元年 1 播磨の赤松（現在は上郡町）に生まる

。「正徹物語」成る

- 四年 4 相国寺常徳院の喝食となる。
- 十年 10 天竜寺慈濟塔下に寓し、次いで西芳寺に移る。
- 嘉吉元年 13 竜淵本珠の室に入り、曇仲道芳の三十三回忌にその頂相を拝して法を嗣ぐ。
- 將軍義教、赤松滿祐に弑せらる。(嘉吉の乱)
- 寛正二年 33 瑞溪周鳳より「小補」の軒号を受く。
- この年京で餓死者八万余という。○「さざめごと」成る。
- 応仁元年 38 八月、桃源瑞仙らと共に乱を避け近江慈雲寺に寓す。
- 十一月、桃源と永源寺竜門庵に寄寓
- 首阿弥没す。○桃源は史記抄執筆
- 文明四年 44 帰京、細川勝元の手になる「小補庵」に住す
- 十年 50 三月、等持寺に入院
- 十二年 52 七月、相国寺住持の公帖を受ける。(入院せず)
- この翌年、一休没す
- 十七年 57 四月、相国寺に入院(わずか十日間)
- 西指庵完成
- 長享元年 59 十一月、南禅寺公帖を受く(入院せず)
- 足利義尚近江に出陣
- 二年 60 四月、相国寺に入寺
- 観音堂(銀閣)建てはじめ。宗祇の水無瀬三吟
- 延徳二年 62 五月、鹿苑僧録に請われたが一乗寺村投老庵に隠る
- 義政没す
- 三年 63 六月、臨川寺三合院塔主となる
- 明応元年 64 十二月、鹿苑院塔主となり僧録の事を司る
- 二年 65 七月、蔭涼職を兼ねる
- 十一月十七日、相国寺常徳院内小補軒で示寂

まず横川の文学活動を三期に分けることにする。第一期は、彼が応仁の大乱の兵火を避けて近江に行く迄の在京時代で、彼の外集の名で

言えば、『小補集』と『補庵集』の時代であり、第二期は、近江時代とも言うべき四年八ヶ月の短い期間で、『小補東遊集』『小補東遊後集』『小補東遊続集』に収められる詩文を製作した時代、第三期は、文明四年四月に帰京して以後の二十年間にわたる長い時期である。

前・後・続・別・新・外(上下)の七部の『補庵京華集』の龐大な作品は、詩風の変遷が殆んど見られないので、一つの時期にまとめることにした。

第一期

前掲の略年譜でもわかる通り、十三歳以後の横川の青少年時代については殆んど不明である。師の曇仲道芳には死後に法を嗣いだので、その文学的影響は直接的には受けていない。曇仲は、「東山養源記」によると四六疏の名手であり、又『小補東遊集』の跋文では、絶海中津と同席して作った彼の聯句は、後進の徒によって伝写せらるれば(1)秀句であったという。横川の文学上の師は主に瑞溪周鳳であった。(2)

後に蔭涼職を勤めた益之宗箴が応仁二年に書いた「前韻詩十章奉酬龍門横川丈人座右并叙」という文章の中に、

(相国寺) 余曾在承天、與丈人交會往來者、泊乎十數年。相逢未曾離文字而談、常聞其散文駢驪之傑語、而如發蒙。尔相宴集、則探題賦詩、託物聯句、句後必恣咲語、而跋燭以罷。其相共諧謔、又猶如尤延之々於楊萬里、而有甚焉。

というのがある。応仁二年まで十数年間といえ、横川の十四・五歳の時からのことであり、青少年時代の詩文の交りを益之は回想して、

宋の尤表と楊万里の交友のようであったと述べているのである。横川の少年時代を語る数少い資料の一つである。

元日立春

次東坡唱和回催来句
北禅和尚題

春と新年と一に併せ回り

春與新年一併回

人として詩を催さると道わざる無し

無人不道被詩催

風流の諸老 小元祐

風流諸老小元祐

前度の秦蘇 又再来す

前度秦蘇又再来

。北禅和尚||相国寺寿徳院内の北禅軒にいた瑞溪周鳳のこと。この時六十四歳。元祐||宋の哲宗の年号。ここは瑞溪らの諸老が、蘇東坡の詩体の元祐体をとるをいう。前度秦蘇||劉禹錫の再遊玄都観詩の前度劉郎今又来の句の劉郎を秦蘇に代えた。秦蘇は秦觀と蘇東坡のこと。

元日と立春が重なるのは享徳三年、すなわち横川が二十六歳の事である。承句の用字はやや冗慢であり、諸老師を元祐体の詩人の再来というのは、当時の禅林詩壇の風潮をふまえての最大級の称賛の辞である。結句は語注に示したような故事に拠った語で、横川の阿諛と銜学趣味が感じられる。『小補集』中の最も早い時期の作品というだけであらう。お義理にも秀作とは言えない。

遠岫残雪

鶻影の没する辺 嵐氣収まり

鶻影没邊嵐氣収

数峯の残雪 日は西に流る

數峰殘雪日西流

眉心 憔悴す 文君の黛

眉心憔悴文君黛

万斛の春愁 白頭を吟ず

萬斛春愁吟白頭

。文君||漢の卓文君。卓王孫の女で司馬相如に嫁す。相如が茂陵の女を妾

横川景三の人と作品

にしようとした時、「白頭吟」を作る。

遠い山の残雪から横川が連想するのは卓文君の眉黛であり、それは彼の胸にひろがる春愁の象徴であった。はやぶさの如く潑刺としていた青春は、三十の歳も間近く衰えなんとし、落日に向かって白頭を吟ずるのは横川自身でもあった。彼の詩風は、江西竜派から希世靈彦へと連なる延長線を出るものではなかった。

浴 梅

一日 梅無くんば 俗了の人

一日無梅俗了人

霜に辛き 雪に苦しみ 未だ全き春ならず

霜辛雪苦未全春

温湯に影落つ 驪宮の月

温湯影落驪宮月

又 花中に浴す 冷なる太真

又浴花中冷太真

。驪宮||楊貴妃の住んでいた驪山宮で温泉があった。太真||宇宙を構成する陰陽の二気。又、楊貴妃をいう。

浴梅というのは文字通り浴湯の中に梅花を入れることなのだろうか。かかる風習がこの頃にあったのかどうか、寡聞の私は知らない。横川は第一句で、宋の方岳の「有梅無雪不三精神 有雪無詩俗了人」という対句を念頭に置いて、限らない梅への愛着をうたう。浴梅―温泉―驪山―楊貴妃―太真と連想をつないでいくのも、又、清冽なる梅花と艶麗なる楊貴妃、霜雪と温泉との対照的なイメージを重ねあわせる手法も、やはり江西らと同じ詩風である。当時の五山の詩僧は、梅枝と太極とを結びつけて詠ずるのが常であったが、横川も梅花といっしょに陰陽の二気を意味する太真を吟ずる。むろん、彼の主題は宇宙の理にあるのではなく、月下に湯あみする楊貴妃の美の情趣気分にあ

八七

ったのである。

読漁父辞

朝に西楚に遊び 暮には南湘

忍ぶべし 衆人醒むるも亦狂なるを

縦い 滄浪を變じて春酒と作すとも

醉眼 終に漁郎に向かわず

屈原は故国を放逐され、『顔色憔悴し形容枯槁』して放浪したのであ

って、西楚南湘の風光を賞でて遊んだのではない。屈原は、『衆人皆

酔いたり、我のみ独り醒む』と先覚者の苦しみを嘗めていたのであ

る。しかるに横川の承句は、『醒めているのは衆人であって、それも

狂なのだ』と逆にうたう。彼は、『煩惱即菩提』というような禅宗独

特の逆説的舌鋒で、『醒亦狂』と喝破したのであるか。私はそんなに

横川を買いかぶりほしくない。次の転・結の句も畢竟、茶化してある。

このことは、後述する近江への旅行文や、晩年の生活などからうなず

けるであろう。

丁亥元日試筆

白髪 春に逢うは 今幾回ぞ

老い来れば 復花に催されず

無能なれど味有り 飯三合

萬歳千秋 酒一杯

雲鶚少年見_レ和又求_レ詩、次_ニ前韻_ニ云

人間の変化は 呂と成回のごとく

夢に 隣家に春色を催さる

朝遊西楚暮南湘

可忍衆人醒亦狂

縦變滄浪作春酒

醉顔終不向漁郎

白髪逢春今幾回

老來不復被花催

無能有味飯三合

萬歳千秋酒一杯

人間變化呂成回

夢被隣家春色催

治乱興亡 花 一笑

百年 三万六千杯

。呂成回_ニ八仙人の一人の唐の呂洞賓(号は回先生)と、子路の弟子で、

子路に君子として推重された成回。

応仁元年丁亥は横川の三十八歳の春である。まだ『白髪』、『老来』と

詠ずる年でもないのだが、これまでの詩人の『光陰隙駒』を嘆じて老

人ぶるポーズを抵抗もなく模倣する。廿六歳の元日には、『無人不

道』被_レ詩催_ニ (元日立春)と詠じたのだったが、十二年を経た三十八

歳の新春には、『老来不_レ復_レ被_レ花催_ニ』と部分否定の語法を用い、さら

に、『夢被_レ隣家春色催_ニ』と歌っている。結局、どう歌おうが、又、自

分が無能になろうが、天下の治乱興亡など横川のかかわりのないこと

で、たゞ一杯の酒、百年にすれば三万六千杯の酒があればよかったの

である。「読漁父辞」の結句の『醉顔』も、屈原に重なり合った横川

自身の酔顔であったのであり、彼の陽気なといえは陽気な、悪く言え

ばアカダンのな性格が表れているように思える。

横川景三の弟子の景徐周麟の手になる「夢記」は、禅者たる横川の

横顔を写している。それは、『小補年未_レ及_ニ不惑_ニ』という語から、応

仁の大乱以前、即ち前掲の「丁亥元日試筆」の作と同じ頃の彼を物語

る文章である。

因憶、二十年前、小補年未_レ及_ニ不惑_ニ、而吾山飛樓湧殿未_レ委_レ地、

大衆掛_ニ名籍_一者、未_レ減_ニ千人_一。

と、乱前のまだ叢林の盛んなりしさまを述べ、
上而鳴_ニ于僧中_一二者講_ニ詩文_一、下而少年侍者挾_レ笈奔走、東廊下嘯_レ風、

西廊下吟月、互指其名曰、某也善絶句、某也善聯句、某也四六、某也散語。汲々於名者、猶汲々於利也。方此時、小補生而妙于著述、如龍得水、無能出其右者。前輩著宿、放一頭地出、以故逢場稱首、對客揮毫、益出益妙、皆曰天才也。

誰それは絶句がうまい、聯句が達者だ、いや誰それは四六が上手だ、散語が堪能だと噂しあう禅林——それは宗教道場というより詞場と呼んだ方がふさわしい——で、横川は著述と揮毫の天才と称せられていた。しかし、

小補未以此爲足矣。斗室置椅子一坐禪、一段大事因緣、貼在鼻尖上、潛鞭密鍊、自參自究、而有省。

と、横川はそういう風評に満足せず、孜々と坐禪に努めたというのである。ここで問題なのは、右のように景徐の述べる宗教人横川と、前掲の詩に表現されるデカダン詩人との二重性である。矛盾と言ってもいい。彼の奔放な詩を、かの風狂の一体の『狂雲集』の如く解するなら問題はないのだけれど。この問題はしばらく宿題にしておいて、第二期の作品を読み進むことにする。

第二期

応仁元年八月廿四日、横川は友人の桃源瑞仙と共に京師を出る。「題横川關」にはじまる『小補東遊集』は、龐大な彼の詩文集中の圧巻である。中でも「湖上逢故人詩叙」は五山僧の紀行文中、屈指の作品と言えよう。しばらく煩をいとわず、原文を断片的に混えつつ紹介

してみる。

「陸路か舟行か」と桃源に撰択を迫られた横川は、躊躇せずに舟行を採るが、これがそもその行路難のはじまりであった。

同舟渡者五六人、有跛趺而禪者、有看經而祈者、或有掀篷而吟、叩舷而歌者。獨桃源酣寢於浪花之中耳。

舟中の人のさまざまの様態を写しているが、桃源の悠然たる寝姿が印象的である。平穩な船旅は束の間で、湖上で遇った一釣舟におどかされた船頭は舟を岸に繋いで去ってしまい、横川達は沙上に不安な一夜を野宿しなければならなかった。夜が明けても船頭の父母は出発を承知しない。

昨暮發坂本、而今朝到柳濱、吾所約也。留滯于此、以待賊乎。何日而可往哉。死生有命。雖羽殺猶有不中者。豈以行李妨余行乎。若負吾約則還賃、否則如約。

「もし約束にそむくんなら金を返せ、それがいやなら契約通りにしろ。」という横川の激しい語気がリアルに感じられる。船頭はやむなく舟を出すがすぐ湖賊に追跡され、腹を立てた船頭は舟を堅田に寄せ、又もや立ち去ってしまう。

余與桃源下舟、茫然而立。天氣快晴水天一色、瞻前平野萬丈之山、顧後比叡三千之院、隱顯乎平湖之山、如妍醜之對明鏡。既而夕陽西下、人影在地。鷹陣落而沙平、魚市散而風腥。疎鐘之出遠寺也、長笛之起漁村也、雖瀟湘八境、不能過焉。桃源笑曰、不逢賊船、安得如此偉觀。

対句を巧みに用いてはいるが、虚飾に墮していない。怒りと失望のあ

と、茫然たる横川の眼にうつる湖畔の景は、別天地の感があつたのだろう。一行はそれから徒歩で船頭の家まで辿りつき、垣根から盗み聞きしてみると、船頭も賊の一味であつた。横川と桃源は聯句して夜を過す。その翌朝、

桃源使_レ人緩_レ頰説_二舟師_一以_レ行_レ賂。舟師大喜誘_二賊數人_一、護_二我舟_一而出。

これまで私が桃源の言動に三つの傍線を付したのは、故郷への往還で旅慣れているとはいへ、泰然自若として臨機応変の処置をとる桃源の性格がよく表れているからである。桃源の賂賂によって、もう無事な旅が出来ると思いきや、今度は強風が出て、船客は頭痛と嘔吐とに悩まされる。

吁、士之處世、窮者多而達者少。天胡爲使_二吾輩_一臻_二此極_一者、如此甚哉。

違約の船頭に金を返せと怒ったり、湖畔の風光を瀟湘八景よりすばらしいと大げさにはめて喜んだり、はてには、天を仰いで歎息するなど、横川の振幅の激しい心情が赤裸々に綴られていて、桃源の性格と対照的である。船頭が風の静まるのを待つ為、兵主という地に舟を着けると、桃源はこの地の安楽寺に、故旧の月翁周鏡のいることを思い出す。

余曰、寺安樂也。人故人也。不可_レ不_レ往。

荒れる天を恨んでいた彼は、又もや一転して大喜び。寺を訪ねて聯句作詩に明け暮れる五日間を過したのである。

以上、いささか長々と叙文を紹介したが、この後に、月翁・横川・

桃源・春坡・勤公（桃源の弟）の七言が記されているのである。ここでは横川の作だけを挙げておく。

白頭 乱を避けて行舟に掉しさおぎ 白頭避亂掉行舟

風雨 兵前 草木の秋 風雨兵前草木秋

若し詩を論ぜずんば湖上に宿すとも 若不論詩宿湖上

何の面目有りてか 沙鷗に見えん 有何面目見沙鷗

結句の「沙鷗」の語は、杜甫の「旅夜書懷」を想い出させる。安史の乱を避けて浣花溪の草堂にしばしの安住を得ていた杜甫は、嚴武の死にあつて楊子江を下り、

名は豈に文章もて著われん

官は応に老病にて休むべし

飄々 何の似る所ぞ

天地 一沙鷗

と詠じたのであつた。横川が「若し詩を論ぜずんば……」と肩ひじ張って文学を強調するのは、「名豈文章著」と文学の才能を心弱く否定する杜甫を念頭に置いてのことではなからうか。「沙鷗」の語は『列子黃帝篇』の無心の象徴たる鷗鳥をも連想させ、さらに又、ここには挙げなかつた勤公の「白鳥社中」や、安楽寺聯句百韻の「初結白鷗社」という句を見ると、月翁の友社の名が「白鷗」であつた事を推測させる。従つて横川の結句は、「詩を論じなかつたらどうして月翁師ら友社の人達に顔をあわせられよう」という意味にもなるのである。

さきに私は、第一期の横川を論じた終りに、宿題を提示したままここまで書き進んで来たが、叙文に見られるような横川の躁鬱症的な振

幅の激しい性格、杜甫の句を意識して文学を強調し言挙げするところから考えると、「読漁父辞」や「丁亥元日試筆」に表現される横川の方が彼本来の姿であり、景徐の「夢記」に描写せられた横川は、師を尊崇し宗門を再興せんとする景徐の意識が創り上げた横川像ではなかったかと思われる。勿論感激性の横川は、一時参禅弁道に励んだこともあったであろうが。

五日間、安楽寺で心身を休めた一行は、京の空に火の手の揚がるのを見ながら路を進めて、やっと桃源の郷寺の慈雲庵にたどり着く。ほどなく永源寺内龍門庵に移り、この土地の実力者であり文人でもある小倉実澄の庇護を受けつつ、桃源は「史記抄」の筆を進め、横川は風雅の日々を送ったのである。

題白屏風

鶴膝蜂腰 墨は烟に似れども

鶴膝蜂腰墨似烟

詩を論ずるは 真箇 禪を論ずるに勝る

論詩真ケ勝論禪

同風 千里 三張の紙

同風千里三張帋

咲うに堪えたり 玄沙未だ玄に到らず

堪咲玄沙未到玄

○鶴膝蜂腰 作詩上の八病の一。同風千里 太平のさま。○三張紙 三枚の屏風のほり紙。三張は張載、張協、張元の晋の文章家をもいう、玄沙 唐の高僧の玄沙師備、雪峯義存の法を嗣ぐ。「五灯会元」玄沙章に、師一日僧をして書を送り雪峰に上らしむ。峰、絨を開くに白紙三幅を見る。僧に問う、「会するや」曰く「不会」峰曰く「道うことを見ずや、君子は千里同風」とある。

「詩も文字も下手だが、論詩は論禪に勝る」と言い、暗に三張の文章家をはめる。義存の下で玄旨を大悟した玄沙を、未だ玄と嘲笑

するのは逆説的表現であろうが、横川の心底の声（文学を肯定する思想）を表すものと私は解する。彼はこの頃の詩の中でよく「咲う」。

手に展ぶる華牋 一笑に翻り（又依前韵者二十首）

若し一咲を添うれば 咲い、四と成る（三咲図）

鼓角声中 盃を挙げて咲う（扇面）

急に沙弥を喚び去て 酒を沽わしめ

一声咲破す 飯山の雲（同所、携三十銭爲、余買濁醪）

白髪が残僧 止 咲うべし

身は乱を避くと雖も 口に詩を言う（寄景徐麟藏主）

咲、の字と共にうたう傍線の句を読めば、横川は乱中に酒を飲んで

は笑い、詩を吟じては笑いとはしているのであり、これらの句からも、既に述べた彼の性格が確められる。そして、

慚愧す 詩に京様の春の無きを（謹依覺雲和尚詩韵）

と、横川は自分の作品に都ぶりが無くなり、土臭くなるのを慚じているのである。この頃の彼の詩には、静かな飯高山に住しながら写景詩は殆んど見られず、右のような観念詩、社交詩、題詠が大部分を占める。彼は、

自謂、頗學得道者之風矣。而及使者入門、形馳魄散、生龜脱筒、可如何也。（答継宗派公侍者書）

京からの使者が手紙を持って来ると、そわそわと生龜脱筒する（俗情が生ずる）のをどうすることも出来なかったと告白している。後に彼が師の瑞溪周鳳を訪れて、近江での作品集たる『小補東遊集』を見せると、瑞溪は、

(横川) 三十年出入官寺、貪釣名之餌、傷射利之弓、非我徒之所取也。今也天下騷亂、去子粘、解子之縛、何幸過之。(寄桃源詩序)

と訓戒し、横川は、余聞之、遍身汗流、と冷汗を流しているのである。彼自身も文明元年二月に書いた「小補東遊集」序で、

余自幼入京、京居三十余年、文字海而釣名、人我林而獵利、苟有問禪問道、答之以蟬以稻、豈不愧于内也耶。丁亥歲、避亂東遊、乞食於江之飯山、不敢償行脚債也。於是乎、水邊林下、風流之癖、未愈者往々在焉。

と、京にあっては名利をあさり、似而非の禪問答を行って心に愧じず、飯高山に庵居しても風流の癖は治らなかつたと述懐しているのである。少しくどくなるが、瑞溪の「小補東遊集后叙」も抜萃しておこう。

子方參禪爲務、何暇從衲衣下蒲團上流出、而能擯花簇錦、如此研麗也耶。爲道日損、損之又損、以至於無爲。無爲而無所不爲者乎、可尚也。

お前は參禪が本務なのに、どんな暇があつてこんな美しい作品集が出来たのか。行道を日々損じ、徹底的に無爲となつて、自然と出来た詩文ならば、尚いのだが。

「者乎」は、文勢から疑問・仮定の意味に、私は解する。この「后叙」も、近江時代の横川が、禪者というよりは文人とも言うべき日々を送つていたことを暗に示す。

右の「小補東遊集后叙」の後に次の一篇がある。それは応仁二年二月廿三日に景徐周麟に託して岐陽の萬里集九に送つたもので、この章をしめくくるのにふさわしい。

乱裏 人は西に 我は己に東に 亂裏人西我已東
曾遊の夢より醒むれば 落花の風 曾遊夢醒落花風
存没を知らんと欲せば 聯句を看よ 欲知存没看聯句
四十 生涯 一秃翁 四十天涯一秃翁

「四十歳といへば、孔子は不惑と言ひ(論語爲政篇)、孟子は不動心と述べた(孟子公孫丑上)。ところが頭の禿げた私は、天の果てで夢から醒めて落花の風に吹かれている。だがまあ私の聯句を見てくれ、私は健在なのだ。」結句の「一秃翁は、功德の具わらぬ仏者を意味する、一秃乗や、かの愚禿親鸞の語を想起させる。「このわしは宗教者としては駄目だが、聯句だけは……」という自信ある横川の口吻が行間から聞こえるようである。

第三期

文明四年、四十四歳の横川は帰京し、細川勝元の作つてくれた小補庵に住する。以後の作品集『京華集』は希世の名づけるころ。瑞溪はもう老齡で、この翌年には八十三歳で示寂しているのであるから、横川のこれ以後の文学は、希世靈彦の影響をうけることになる。

さて、ここでもう一度景徐周麟の「夢記」の一節を引用して、帰京後の横川の一面を瞥見してみたい。近江から帰落して間もない頃、二人は種花道場の路上でばったり逢つた。

小補謂予曰、「吾先是在三叢寺、執爲極則二者、碎碎零零、前年十二月十九日、在三曹源寺入浴、浴後束脚布、按三頭上歸庵。倚溪邊古松而立、如有所失。自嘯時及昏鐘後、脚布餘滴已凍、寒氣自頂徹踵、忽然大悟。」

横川は大悟の体験を景徐に語っているのである。瑞溪の叱責によって、一大勇猛心を起して修行に励んだのであろうか。ここは独断的な私見はさしひかえ、疑問の助詞だけを付しておこう。

文明五年正月五日、希世靈彦の書齋の酒席で句を聯ねたあと、次のような作品をものしている。序文の一部もあげておく。

(前略) 我岩栖師翁、乃學者之太山北斗也。癸巳歲正月初五、忝拜床下。蓋以賀春初也。翁命有隣、就其書室置酒。翁笑曰、「座中先舉酒。」余應聲曰、「囊底又添詩」翁大喜。(中略) 吁、余也、酸寒儉陋、拙於賦詠。非翁賜潤色、則奚臻此哉。(後略)

百歳 人間の世に

聯句の詩に 如くは莫し

風晨にも 月夕を兼ね

葉雨も 又 花時

天地は皆 吾が有

往還 独尔として思う

我が翁 洛下に居す

祇合に襟期を話すべし

首聯は「欲知存没看聯句」の句と同じように横川は自分が聯句

百歳人間世

莫如聯句詩

風晨兼月夕

葉雨又花時

天地皆吾有

往還獨爾思

我翁居洛下

祇合話襟期

に並々ならぬ自信と好尚を有していることを宣言しているものであり、句を連ねておれば、風の吹く朝でも月夜の詩情にひたる事が出来る、とうたう。

『補菴京華集』は、右の叙文に述べる希世の文学を継承する龐大な詩文集で、その作品を読み通す時、退屈な「作業」に墮することも一ならずであった。

小補和尚、携陞座草案來。誦之如水就下也。太奇太奇。(日録 文明十九年九月三日の条)

高先和尚拈香草案、小補持之來一見。則其韻九十九字、太長也。(日録長享二年三月廿七日の条)

鹿苑相公三十三年忌之陞座、和尚勸之。古今無比例、長陞座也。至今兒童走卒皆識之。(日録延徳三年正月廿五日の条)

四六文の拈香法語や陞座法語と詩とを同日に論ずることは出来ないが、右の『蔭涼軒日録』に見られるような長文が重んぜられる風潮が、詩の世界にまで波及しなかったとは断言出来まい。事実、東山時代に入ってから禅僧の詩文集は、『京華集』は言うまでもなく、『梅花無盡蔵』にしる『翰林葫蘆集』にしる、多量の作品を収める。

四十四歳から示寂する迄の横川の詩風は、殆んど変化を見せない。司馬遷が「詩書隱約は其の志の思いを遂げんと欲する也」(史記、太史公自序)と述べ、韓愈が「子厚斥けらるること久しからず、窮すること極まらざれば、人より出る有りと雖も、その文学辞章、必ず自ら力めて以て必ず後に伝えらるるを致さんこと、今の如く疑い無きこと能わず」(柳子厚墓誌銘)と述べたような窮状は、内面的にも外面的

にも、横川には襲って来なかったように思われる。彼の作品を読み通すことの退屈さは、ここに一因があるのであろう。

横川の『京華集』が、後半世の文学の師たる希世と異なる点は、和習の甚だしいことである。希世も常光院堯孝邸で晩桜を見たり、一条兼良の和歌に和する詩を作ったり、飛鳥井雅親と岩栖に遊んだりして、和文学の人々と交わっているが、その作品自体には和習は見られない。ところが、『京華集』は、師の瑞深周鳳にもまして、この傾向が甚だしい。九牛の一毛の例をあげると、

扇 一面

九里の毘原 雲樹の間

九里毘原雲樹間

泉河 鎖さず 夜関を過ぐ

泉河不鎖夜過關

岩根 吹き落す 浪花の雪

岩根吹落浪花雪

四月 風寒し 衣借山

四月風寒衣借山

。九里||九里雲松という松が西湖にある。

この絶句は、『古今和歌集』の都出でけふみかの原いづみ川 川原寒しころもかせ山に働ったもので、平仄を合わせてはいるが、発想も技巧も和習の強い作である。日本漢詩である以上、私は頭から和習を斥けはしない。日本人作者の詩情を芸術味豊かに表現するものであるなら、用語が日本臭であっても、それはそれとして秀れた作品なのであるが、右の横川の「扇面」は、対象の凝視も、鍊りぬいた詩語の選択も、美意識も見られぬ凡作に過ぎない。

ところで、横川が和歌に言及する時、新古今歌人の藤原家隆の名が再三見られるのは何か理由のあることなのだろうか。例えば、

浦 鶯 此以下一首、勢州館中、分家、隆歌題

官柳雖_レ春一鳥無 雒城 兵馬亂_ニ於胡_一

鶯々分_レ宿鷗沙底 未_レ使_ニ江山入_ニ戰圖_一

という作があり、文明十八年に彦竜周興に書き与えた扇の讚には、

高砂松雪

夕陽 芳草鹿呦々 路入_ニ高砂_一山更幽

唯有_ニ家隆_一歌一首_一 與_レ松白雪_ニ到_ニ千秋_一

と吟じ、延徳二年七月に作った「小倉隨縁居士像贊」では、

尋_ニ漢人譜_一大倉々公 分_ニ倭歌髓_一定家家隆

という句を作っていることを指摘して、後考に俟ちたい。

扇 一面

鳩 華表に鳴きて源平を定め

鳩鳴華表定源平

筆を下せば 神の如き僧覚明

下筆如神僧覚明

跪きて願書を奉じ 兼せて箭を献ず

跪奉願書兼献箭

旌旗 雪白し 越中城

旌旗雪白越中城

これは言う迄もなく平家物語巻七の「木曾願書の事」を詠じたもの。桃源の『史記抄』を読むと、彼が平家物語を盲僧から聞きながら筆を執ったことが記されているし、

晩來小補和尚携_ニ東雲侍丈_一來。謝_ニ昨宵之惠意_一。有_レ宴、時上原對

馬守來陪_ニ宴。小補唱_ニ懺儀_一、且語_ニ平家_一。(日録 長享二年正月十

五日の条)

とあるように、横川は宴席の余興として平家を語っているものであり、厳肅たるべき懺儀さえも酒宴の場で唱えられている。なお、『蔭涼軒

日録』は、

於金閣有宴。宴罷横川、景徐、功叔及愚(龜泉)皆解衣乘船。横川爲渡子^一、尤妙于水手^二、或發棹歌^三、或聯句^四、實一快也。(中略)

院主、月翁、桃源之三老在上座。横川自緣戲桃源云、「爾何色、青醒交紫衣乎。」一座呵々大笑。(日録、長享二年五月九日の条)

と、五山の高僧達の姿を記している。たぶん金閣の前の鏡湖池に舟を浮かべたのであろう、横川は船頭になって巧みに棹を操って舟歌をうたい、聯句に興ずる。舟から上つては、酒に弱い桃源の青い顔色をからかったりしている。実に奔放な横川の姿がある。横川の文学上の弟子で天折した彦竜周興の作に次のようなものがある。

和月嶺試筆 小補之徒

道德文章支竺桑 乃翁濯漢曝秋陽^一

春風桃李皆門下 許我南豐一瓣香

これは横川とその門下の道德文章を賛える七絶だが、右の月嶺という少年僧は、

請横川和尚點、乃點五首出之。月嶺少年以彼校割渡之。往者皆執其手、則異香薰徹。及歸皆手不能浴、令鼻之。

(日録、長享二年五月六日)

というように体から芳香を放つ美少年で、

往小補則有酒宴。歌呼之聲聽戸外。先遣人伺之則横川出、延愚入座鋪。宴遊盡美盡善。就中月嶺美文、回雪袖得其妙哉。(同九月廿四日)

横川景三の人と作品

伊唔か誦経が聞こえるべき禅院の外まで歌声が流れ、善美を尽くした宴席で、軒主横川の徒の月嶺は美しい舞いをまうのであった。「蔭涼軒日録」の描くかかる華美な、酒と余興と聯句とに明け暮れる禅林世界に、どっぷりとつかっている横川の晩年の文学も、ほぼ推察出来るではないか。

(短大國文学科助教)

註

- (1) 漢文教室八十四号(昭和四十三年一月)の拙論「絶海中津の詩風」参照
- (2) 横川は「奉憶北禅和尚」と題して、北斗非高仰北禅 臥雲深處是吾天 身生衰生無遺恨 目染耳濡三十年と詠じている。
- (3) 漢文教室九十七号(昭和四十四年七月)の拙論「江西竜派の詩風」参照
- (4) 東洋文化第二十二、二十三合併号(昭和四十五年四月)の拙論「桃源瑞倦の史学―史記抄を中心として―」参照。